

情報部

第一課長

昭和八年壹月拾壹日接受

公機密第二五〇號

昭和七年十二月二十四日

在滿洲國
特命全權大使 武藤 信



外務大臣伯爵 内 田 康 哉 殿

宣傳用印刷物原稿返送方依頼ノ件

十一月九日附報一機密第五八號貴信ニ關シ御送附ノ印刷物 "Freedom,

Manchurians Plea for Independence" 御來示ノ通記布方取計ヒ置キタル處右印刷

物原稿ヲ中央陸軍側ニ送付セル當地軍側關係者ヨリ右原稿ニ筆者私有
ノ寫眞添付セラレアル等ノ事情アル爲該原稿ノ全部ノ返還ヲ受ケ度キ

在滿特派全權事務所

S 1.3.1.0-1

42

0077

趣申越有之タルニ付テハ右當方宛返送方御取計相成度此段申進ス

在滿特派全權事務所

S 1.3.1.0-1

43

0078

文書課長

公信

(甲 號用紙)

文書課發送 昭和七年三月廿七日發送済

主 管 情報部

主任 第二課長

(起草 昭和七年三月廿七日)

正校 (原稿)

附 属 書 通

淨書 (1/5)

機密 第

號 大正

昭和七年三月廿七日

附 属 書 通

受 信 人 名 大 淵 満 鉄

件 名 ソフトンレ 委員会 一行 満洲 旅行 費用 1 件

件 名 ソフトンレ 委員会 一行 満洲 旅行 費用 1 件

件 名 ソフトンレ 委員会 一行 満洲 旅行 費用 1 件

件 名 ソフトンレ 委員会 一行 満洲 旅行 費用 1 件

件 名 ソフトンレ 委員会 一行 満洲 旅行 費用 1 件

件 名 ソフトンレ 委員会 一行 満洲 旅行 費用 1 件

件 名 ソフトンレ 委員会 一行 満洲 旅行 費用 1 件

件 名 ソフトンレ 委員会 一行 満洲 旅行 費用 1 件

發 信 人 名 白 鳥 博 報 部 長

名 達 綴

公 信 案

外 務 省

S 1.3.1.0-1

44

0079

記

REEL No. A-0353

0057

アジア歴史資料センター

在伯林 林藤井臨時代理大使 來電要領
 聯國圖書委員會 爲此 指示
 改編上 說明、圖解、獨文字幕等ヲ 附シ
 獨鉄一名ニ於テ 目下 UFA 会社ト之カ
 上映方交渉中ニシカ 右改編及通由費用
 七五〇馬克 ^{右費用} 補給 加成 度旨 切申
 出ルニ付テハ 獨鉄 本社ハ 相臨 上 支出

公 信 案

S 1.3.1.0-1 0081

編並ニ 通由費用ニ 因シ 割戻 趣旨ヲ
 獨債 卅金 七五〇馬克 支出方 割戻 趣
 佐 變 爲 方ニ 於テ 其ノ 半額 ^{右費用} 可致
 修了 致款ハ 貴社ニ 於テ 引受 加成
 換 以 配 重 加 給 及 以 故 以 依 願 得
 長 官 爲 佐 致 具

公 信 案

外 務 省

S 1.3.1.0-1 0081



公 信 案

外 務 省

御回示相煩度此段及御照會御意候 敬具

澤田局長来電六六改文添付ノコト

S 1.3.1.0-1 49 0034

文書課長

文書課發送 昭和八年壹月六日 發送済

主 管 管 主 任 第三課 (起草) 昭和八年一月四日 林

普通 第 半 公 信 號 大 正 一 昭 和 八 年 壹 月 六 日 附 附 局 書 通

受 信 大 淵 滿 鉄 東 京 支 社 長

人 名 發 信 人 名 白 鳥 部 長

件 名 (ソットシニ委員一行滿洲旅行) (アイルシニ関スル件) 名 込 綴

拜啓時下益々御清祥奉賀候陳者今般在
 喜村澤田局長ヨリ別紙密ノ通り電報越之候
 ニ付テハ委曲有ニテ御了知ノ上御意當何分ノ儀

公 信 案 外 務 省

S 1.3.1.0-1 48 0033

REEL No. A-0353

アジア歴史資料センター

寫送先

大臣 次官
電信課長
亞細亞 歐米 通商 條約 情報 文化 人事 會計

A310.3-1

昭和8 五六二 暗 東京 十一月十一日後發 情
本省 一月十一日後着

内田外務大臣
第二五號

武藤大使

在東京米國「フオックス」活動寫眞會社技師及助手ヲ滿鮮鐵道「バス」發給、滿洲ニ於ケル宿泊料負擔及案内者ノ隨行其他ノ便宜許與ハ當方ニ於テ取計フヲ條件トシテ當地ニ呼寄せ約二週間滞在ノ豫定ヲ以テ滿洲ノ建設的方面ニ關スル「ニュース」映(畫)ヲ當方指導ノ下ニ撮影シ海外ニ配給セシメ度キニ付先方ノ都合問合セ御回訓アリ度ク日本内地ニ於ケル鐵道「バス」ハ本省ニ於テ配慮アリ度シ尙本件軍側共打合濟ニ付陸軍省共聯絡アリ度シ

S 1.3.1.0-1

0086

REEL No. A-0353

十二月三十日著電
在壽府 澤田局長發

内田外務大臣宛

滿鐵ニ於テ作成セル聯盟調查團滿洲旅行「フィルム」二組ノ中一組ハ當方ニテ改造シ他ノ一組モ獨逸方面用トシテ伯林ニテ滿鐵阪本ノ手ニテ適宜改造シタルニ依リ是非共原形ノ儘聯盟へ寄贈シタキ滿鐵ノ希望ナラハ新ニ一組ヲ當方へ急送アリタシ

右滿鐵へ御傳へ結果何分ノ儀御回電ヲ乞フ

S 1.3.1.0-1

0086

公 信 案
 外 務 省
 度キコト
 滞 在 期 間 二 週 回 ニ テ ハ 分 分 ナ ル コ ト ア ル ベ キ ナリ
 機 械 ・ フ ィ ル ム 等 ノ 攝 影 ニ 對 ス 無 税 通 関 ノ 手 續 ヲ 取 ラ
 等 モ 面 白 キ 題 材 ト 思 考 ス ル コ ト
 三 月 舉 行 サ ル コ キ 建 國 記 念 祭 ノ 状 況 ニ ュ 込 價 値 大 ナ
 リ コ リ 其 他 學 校 教 育 ノ 模 樣 ・ 滿 洲 國 軍 隊 ノ 訓 練 状 況
 聲 語 教 百 五 十 語 以 內 ニ コ ト
 三 月 舉 行 サ ル コ キ 建 國 記 念 祭 ノ 状 況 ニ ュ 込 價 値 大 ナ
 リ コ リ 其 他 學 校 教 育 ノ 模 樣 ・ 滿 洲 國 軍 隊 ノ 訓 練 状 況
 聲 語 教 百 五 十 語 以 內 ニ コ ト

S 1.3.1.0-1 0030

公 信 案
 外 務 省
 當 乘 氣 ノ 模 樣 ニ テ 早 速 書 面 ニ テ 紐 育 本 社 へ 照 會 返 電
 ヲ 受 ク コ ト 述 ヘ タル 上 左 點 關 貴 市 御 配 慮 ヲ 煩 上 度
 申 出 テ タル 趣 ナリ
 攝 影 ノ 題 材 如 何 ナル モ 豫 ヲ 承 知 シ 度 キ コ ト
 執 政 及 貴 大 使 ノ イ ン タ ヴ ュ ー 是 非 共 撮 影 シ 度 ク 執
 政 ノ 發 聲 是 非 英 語 ニ テ 願 ヒ 度 ク 又 貴 大 使 ニ 於 テ 英 語
 ヲ 使 用 セ ラ レ サ ル 場 合 熟 練 志 通 訳 ヲ 得 度 キ コ ト 各 ノ 發

S 1.3.1.0-1 0039



情報部

第一課長

昭和八年貳月拾日 接受

公機密第九一號

昭和八年二月一日

在滿洲國

特命全權大使 武藤 信



外務大臣伯爵 内 田 康 哉 殿

宣傳用印刷物原稿返送方依頼ノ件

客年十二月二十四日附公機密第二五〇號拙信ニ關シ英文小冊子

"Freedom"ノ原稿ハ一月十三日附報一機密第四號貴信ヲ以テ御送付越

有之タルニヨリ軍司令部係官ニ轉交シ置キタル處右原稿ト共ニ裝ニ當

地軍部ヨリ陸軍中央部ニ送付セル趣ナル "Plunder," "Contrast"

"The Open Door" "Manchuria Protected"

ノ四種ノ

在滿日本帝國大使館

S 1.3.1.0-1

0093

原稿ハ本省ニ於テ印刷ニ附セラルルニ至ラサリシモノナルカ筆者ニ
返還ノ必要アル爲之亦原稿及之ニ添付ノ寫眞返送相煩度旨右係官ヨ
リ申出アリタルニ就テハ當方宛返送方御取計相成度此段申進ス

S 1.3.1.0-1

0094

在滿日本帝國大使館

REEL No. A-0353

0055

アジア歴史資料センター

公文書案

外務省

米子各紙「ジャパン・ソサイテ」主要都市産業
 會議、臨米主要西原団体、大学、園

付之らん紙ニ付局念ヤリ係

追テ右「日外交新」ヲ登記、直轄送

スルニ付可然即利用在在云々

西皮ニ白名一覽表 (新表別表ニテ) 部送ニ送付

S 1.3.1.0-1 0096

公文書案

外務省

分類 3.1.0.3-1

受在在云々
 別表一五
 九十五ノ件

信發 情報部

名件録記 姓名宣傳
 12.6.28 録

名件 悔海五外交新ニ表集等送付一件

悔海五外交新ニ作製ニ係ル英文ニ表集ヲ
 一編、牙ニ稱名 (新表別表ニテ) 部及英文悔海

主 情報部長 昭和八年貳月八日發送済
 任 第一課長

昭和八年貳月六日 日附 附屬

正校(原稿) 関(淨書)

附屬物別便

S 1.3.1.0-1 0095

復外公館表 昭和八年 日附

機密合第

號 (總數一四七)

在英大使館 / 3	在倫敦總領事館 / /	◎南 北 米 (三三)	在米大使館 / /	在シカゴ領事館 / /	在新加坡總領事館 / /
在佛大使館 / 3	在漢堡總領事館 / /	在ブラジル大使館 / /	在カンナダ公使館 / /	在ニューヨーク領事館 / /	在カルカタ總領事館 / /
在獨大使館 / 2	在アンゲルズ領事館 / /	在カナダ公使館 / /	在メキシコ公使館 / /	在オーストラリア領事館 / /	在マニラ總領事館 / /
在伊大使館 / 2	在里昂領事館 / /	在メキシコ公使館 / /	在ベルギー公使館 / /	在ハヴァナ領事館 / /	在ダヴァオ領事館 / /
在白大使館 / /	在馬耳塞領事館 / /	在ベルギー公使館 / /	在チリ公使館 / /	在マサトラン領事館 / /	在シドニー總領事館 / /
在土大使館 / /	在未蘭領事館 / /	在チリ公使館 / /	在アルゼンティン公使館 / /	在リオデジャネイロ出張所 / /	在西貢領事館 / /
在瑞西公使館 / /	在ストックホルム領事館 / /	在アルゼンティン公使館 / /	在ホルンホルム總領事館 / /	在リマ出張所 / /	在峇峇領事館 / /
在西公使館 / /	在巴里國際聯盟帝國事務局 / /	在ホルンホルム總領事館 / /	在桑港總領事館 / /	在シエラレオネ出張所 / /	在關貢領事館 / /
在蘭公使館 / /	在帝國事務局 / /	在桑港總領事館 / /	在紐育總領事館 / /	在暹羅公使館 / /	在孟買領事館 / /
在瑞典公使館 / /	在倫敦商務書記官事務所 / /	在紐育總領事館 / /	在オーストラリア領事館 / /	在暹羅公使館 / /	在孟買領事館 / /
在ラトヴィア公使館 / /	在伯林商務書記官事務所 / /	在オーストラリア領事館 / /	在シエラレオネ出張所 / /	在暹羅公使館 / /	在孟買領事館 / /
在ポーランド公使館 / /	在ストックホルム領事館 / /	在シエラレオネ出張所 / /	在暹羅公使館 / /	在暹羅公使館 / /	在孟買領事館 / /
在エストニア公使館 / /	在ストックホルム領事館 / /	在暹羅公使館 / /	在暹羅公使館 / /	在暹羅公使館 / /	在孟買領事館 / /
在ルーマニア公使館 / /	在ストックホルム領事館 / /	在暹羅公使館 / /	在暹羅公使館 / /	在暹羅公使館 / /	在孟買領事館 / /
在希臘公使館 / /	在ストックホルム領事館 / /	在暹羅公使館 / /	在暹羅公使館 / /	在暹羅公使館 / /	在孟買領事館 / /
在ポルトガル公使館 / /	在ストックホルム領事館 / /	在暹羅公使館 / /	在暹羅公使館 / /	在暹羅公使館 / /	在孟買領事館 / /
在フィンランド出張所 / /	在ストックホルム領事館 / /	在暹羅公使館 / /	在暹羅公使館 / /	在暹羅公使館 / /	在孟買領事館 / /

0099

◎露 西 亞 (一〇)	◎支 那 (三〇)	◎滿 洲 (二四)	在農安分館
在ソヴェト聯邦大使館 / /	在北平公使館 / /	在滿大使館 / /	在鄭家屯領事館
在浦潮總領事館 / /	在上海公使館 / /	在哈爾濱總領事館 / /	在齊齊哈爾領事館
在アレクサンダー總領事館 / /	在上海總領事館 / /	在奉天總領事館 / /	在滿洲里領事館
在オーストリア分館 / /	在青島總領事館 / /	在海龍分館 / /	在赤峰領事館
在ハバロフスク總領事館 / /	在坊子出張所 / /	在新民府分館 / /	在錦州領事館
在ハルビン總領事館 / /	在濟南總領事館 / /	在吉林總領事館 / /	
在ウラジオストク領事館 / /	在張店出張所 / /	在吉林總領事館 / /	
在ウラジオストク領事館 / /	在張店出張所 / /	在間島總領事館 / /	
在ウラジオストク領事館 / /	在博山出張所 / /	在琿春分館 / /	
在ウラジオストク領事館 / /	在漢口總領事館 / /	在百草溝分館 / /	
在ウラジオストク領事館 / /	在成都總領事館 / /	在局子街分館 / /	
在ウラジオストク領事館 / /	在福州總領事館 / /	在頭道溝分館 / /	
在ウラジオストク領事館 / /	在廣東總領事館 / /	在新京總領事館 / /	
在ウラジオストク領事館 / /	在香港總領事館 / /	在牛莊領事館 / /	
在ウラジオストク領事館 / /	在張家口領事館 / /	在遼陽領事館 / /	
在ウラジオストク領事館 / /	在芝罘領事館 / /	在安東領事館 / /	
在ウラジオストク領事館 / /	在蘇州領事館 / /	在鐵嶺領事館 / /	
在ウラジオストク領事館 / /	在杭州領事館 / /	在拘鹿分館 / /	

(昭和八年一月現在)

昭和八年貳月廿六日

八外親第一九二〇號

昭和八年二月九日

長崎縣知事 鈴木信太郎

亞細亞局

内務大臣 山本達雄
外務大臣 内田康哉

山本熊本 鹿兒島各縣長官殿

滿洲事情紹介活動写真會開催ノ件

本月七日滿鉄下関舞滿案内所ヨリ長崎市役所ニ對シ新國家滿洲國紹介ノ左記映画ヲ無料ニ公開致度趣キヲ以テ其ノ賛否ヲ照會ス

之乘リタルカ宜市役所ニ於テハ時節極最モ必要ナリトシ近日中琴城回答ヲ為ス趣ナリ尚南條地

ノ日程左記ノ通り
右及申(通)報候也

一日時

長崎市

二月二十日

熊本市

二月二十日

鹿兒島市

二月廿一日及廿三日

一映画

建國ノ告白

三巻

S 1.3.1.0-1

55

S 1.3.1.0-1

0100

165/2

24/2

冬ノハルビン	一巻
敢然ハ承認ヘ	二巻
興安嶺を越ヘテ	二巻
滿蒙邪波行	五巻
滿洲を満ク	五巻
朝鮮年中行事	二巻
殺名	二巻

2

⑤

S 1.3.1.0-1

0101

REEL No. A-0353

0072

アジア歴史資料センター

寫送先

4.3.1.0.3.1)
分
ア
ウ
ス
ミ

大臣
次官

電信課長

亞細亞
歐米
通商
條約
情報
文化
人事
文書
會計

昭和8 二五七三 暗

新京
本省

十日後發
二月十日後着

情一

内田外務大臣

武藤大使

第一二三號

貴電第九二號ニ關シ

差當リ當方考へ居ル材題へ左記ノ通ナル處寫眞技師當地ニ直行セン

メラレ度材題ノ細目ハ當地ニテ協議決定致度シ

執政(目下交渉中)鄭總理、本使「インタビュー」、建國記念祭、

學校教育狀況、滿洲國軍隊、主要都市、主要産業、飛行機ヨリ觀タ

ル滿洲風景、滿洲風俗、滿洲國建設狀況等

外務省

滿洲國建設狀況等

S 1.3.1.0-1

0102

REEL No. A-0353



アジア歴史資料センター

情報部長

第二課長

記録係

昭和八年三月廿九日接

機密公第二二號

昭和八年二月十四日

在伊

特命全權大使 松島 敬甫

シ

外務大臣 伯島 内田 康哉 殿

「リットン」委員会滿洲旅行活動寫真フィルム二件
 本年二月十日附在壽春國際聯盟帝國事務局發機密
 聯合會第十六號ニ宛シ當方へ送附ノ本件フィルムハ在
 壽春國際聯盟帝國事務局ヨリ國際聯盟伊國代表
 コアロイジ大使ニ貸與セルモノヲ一月中旬同大使ヨリ轉交セラ
 レタルモノナカ同大使ニ於テハ一月初メ關係者側ニ一紙被附セル

任伊日本大使館

68 S 1.3.1.0-1

0105

27/3

情一課長
垂三課長

分發/門3張/項03-1

エニモアリ高カク當館トシテハ之ヲ一般伊國民衆ト公開シテ當
 國ノ如ク遠隔ノ地ニテ滿洲ノ物ナリヤ滿洲ノ現状カ如何ニ然
 カルヤ全ク無智ノ状態ト在ル一般人士ヲシテ其事情ヲ了解センメ
 之ヲ深知スルニ最モ時宜ト急ムト認メタリ
 依テ一九二五年末「フランス」上「政社」カ國民教育ヲ為シ現
 ニ當國ノ一般ニ公開スル時ヲ映画ヲ作成供給シ且一般「フイ
 ル」映画ノ監督ニ當ルニル國營教育映画協會「L'Institut
 National d'Initiation Cinematographique Education (L.N.I.C.E.)
 」ニ對シ本件フィルム公開カヲ交渉シ結果右ハ新滿洲ヲ
 示スモノトシテ且取テ「トラ」同協會ハ右公開ヲ快諾シテ
 ルカ一般公開ニハ存テ和語說明附シ復本ヲ作成スルニ要
 アリ同時ニ本映画主題「リットン」委員会寫真寫真
 トシテハ録シテ專向的ナルニナラス例ハ「委員会寫真」等

任伊日本大使館

S 1.3.1.0-1

0106

柳條溝ニ於ケル鉄道爆破現狀視察ノ詳細等、如キ兵ハ一般
 向トシテハ適當ナラス様又余リ日本側ノ宣傳的ノモトナス時ハ
 在當地支那公使館側トノ關係モ考慮スル要アリ、其々現
 代ノ滿洲ノ實情トシテ日本ノ如カカ、現ニ更テ知ラシムルモ、ト
 スルコト適當ナルヘク之カ爲ニハ、コイルムニ多クカワトレシ説明
 モ必要ニ後シ変更シ度方申出アリ、尙館ニ於テモ右ハ尤
 ノ次第ト認メ要之全体トシテ如何ニ滿洲カ日本ノ如カカ
 依リ治安ノ維持成リ、高深開發セシ文化ノ向上ヲ求ムルカ
 等ノ諸点ヲ映画ニ依リ了解セシメ、以テ如何ニ支那移民
 カ滿蒙ノ平和郷ヲ慕ヒテ移住シ、アルヤヲ知ラシムルコト、女
 性ナリト認メ、依リ右甲出ヲ承認シ、右趣旨ニ依リ上掲
 ニ三個所ヲ削除セル件、大和誌説明附ノコイルムニ復本ヲ
 作成セシメ、同時ニ主題元、滿洲ノ今日ト改メテ公開スルコト

任伊日本大使館

S 1.3.1.0-1 0107

セリ
 在公開ハ一月二十七日ヨリ二十九日迄三日向前期協會映画館
 ニ上場セル、從同協會カ從來ニテ珍シキ流動演劇ナリトテ
 廣告ヲ行ヒタル關係モ、好評ニテ終始セタルヲ以テ同協
 會、於テハ更ニ二月三日ヨリ五日迄公開シ、度々日又其位
 ハ、仔細各地映画館ニ供給シ、公開セシメ、度々甲出アリ、右
 等モ承認シテ引續キ上場セシタルノ事實、日本ノ滿洲ニ於ケル
 如カカ如何ニ偉大ナルヲ信スルニ、相告効果、コイルムト認メ
 然ル
 尙在當地支那公使館側、右コイルムニ、廣告せんヤ、右
 協會ニテ抗議ヲ申入、未リ公開後モ之カ中止カ、主眼
 点未シカ、同協會トシテハ、本件ノコイルムハ、日支事件ノ善悪
 ヲ示スルニ、漸クシテ現象ノ説明ニ、過キルコト、右抗議ヲ認

任伊日本大使館

S 1.3.1.0-1 0108



此能ハストテ拒絶セル趣同協會理事ヲシテカヘ内報アリタ
 リ共爲會中係リ
 尚書地ノ如キ極東ノ現状ヲ知ラテル處ニ於テハ日本内地ノモ
 ノトシテ滿洲ノモノトシテ知ラテル文化ノ如キ極東ヲ知ラシムル上ニ
 於テ興画ノ如キハ特ニ重要ナルモノトシテ見地ヲ據ル
 カルツイルム有之ニ於テハ遠好ハ送附ヲ備ハシ本件ヲ
 イルムハ爲爾方々古中進ス
 本館送附先 聯盟事務局

任伊日本大使館

S 1.3.1.0-1 0109

REEL No. A-0353



情報部

第一

昭和八年二月十五日
機密公第七三號
在中華民國
特命全權公使 有吉
別紙添付

機密公第七三號

昭和八年二月十五日

在中華民國

特命全權公使 有吉



外務大臣伯爵 内田 康哉 殿

昭和八年二月十五日附在外公館宛機密合公第六〇號信寫送付

「ウッドヘッド」著「滿洲國訪問記」送付ノ件

在中華民國上海日本公使館

S 1.3.1.0-1

特 0110

REEL No. A-0353



アジア歴史資料センター

機密合公第六〇號

別册別便

昭和八年二月十五日

在中華民國

特命全權公使 有吉 明



「ウッドヘッド」著「滿洲國訪問記」送付

ノ件

評論家「ウッドヘッド」ハ客年秋滿洲國ヲ訪問シ財政、經濟、政治各方面ノ實情ニ關スル詳細ナル報告ヲ約一ヶ月ニ亘リ同人ノ擔當セ

S 1.3.1.0-1

0111

ル當地「イヴニング、ポスト」「ワン、マンス、コメント」欄ニ掲

載セルカ今般「ポスト」社ニ於テ取纏メ印刷ニ附スルト共ニ著者「

ウッドヘッド」ヨリ別添「リスト」ノ浦歐米有力者ニ直接配付方取

計ハンメ置キタル處右册子ハ滿洲國紹介上有益ナル參考資料ト思考

セラルルニ付別便ヲ以テ左記部數貴館宛送付ス就テハ別添「リスト

」ニ記入洩レノ貴地方有力者ニ對シ可成個人的關係ヲ油ル等我方ノ

宣傳資料ト解セラレサル方法ニ依リ頒布方可然御取計相成度

本信寫送付先 外務大臣 上海

本信宛先及附屬物送付部數

英、米、佛、獨、伊、白、聯盟（各二十部）

蘇聯、土耳其、瑞西、西、蘭、瑞典、波蘭、智惠古、埃、

S 1.3.1.0-1

0112

希臘、羅馬尼、(各十部)

加奈陀、紐育、桑港、市俄古、「シヤトル」「ポトランド

「ロスアスゼルス」「ニューオルレアンス」「ヴァンク

パー」(各十五部)

「カルカッタ」、新嘉坡、「シドニー」、暹羅、「マニラ」

河内、香港、「ケーナタウン」(各五部)

B 1.3.1.0-1

冊 0113

REEL No. A-0353

0080

アジア歴史資料センター

清報部

第二課長

昭和八年三月九日

本機密公オ二八號

昭和八年二月十五日

在奥

臨時代理公使市毛孝三

外務大臣佐壽内田康哉殿

リットン・コミッション・フィルム取扱振報告ノ件

本件・関シ一月廿八日フィルム接列直チニ此種フィルムヲ取扱居ル「ウラニア」ト交渉ノ結果二月三日本館招待トシテ新聞記者並ニ國官廳側其他ノ觀覧見ニ供シタル后「ウラニア」ニ貸与シテ其利用(三回)ニ委シ十四日在致公使館ニ向ケ發送セリ

在奥公使館

S 1.3.1.0-1

0114

193

右・関スル新聞洋要領「日本ノ宣傳タル感ヲ与フルモ兎モ由滿洲ノ実情ヲ知ル上ニ於テ有益ナリ只右フィルム「カリットン」委員會一行ノ視察ノミニ限レルハ不足ノ感ナキ能ハスト云フニ致セリ
亦當時支那ニ於ケル戦争ト題スル「ウフ」社ノ上海事表実写フィルム前後シテ「ウラニア」公刊シ居リ
右爲念申添フ
右報告ス

写壽府縣監事務所へ送付

S 1.3.1.0-1

0115

在奥公使館

情報部

第一課長

別紙

添付

行

宣傳部
滿洲國對外宣傳部

送受

公普通第一五五號

昭和八年二月二十三日

在滿洲國

特命全權大使 武藤 信



外務大臣伯爵 内 田 康 哉 殿

昭和八年二月二十三日附 在英大使外五十五館宛往信寫送付
合普通第二六號

件 名

一、滿洲國善政其ノ他ニ關スル宣傳資料送附ノ件

寫必要ノ向
配付済

三月十四日
アドヴァータイザリニ部分掲載

在滿日本帝國大使館

S 1.3.1.0-1

0116

寫

合普通第二六號

昭和八年二月二十三日

在滿洲國
特命全權大使 武藤 信義

滿洲國善政其他ニ關スル宣傳資料送附ノ件

今般當館ニ於テ作成セル滿洲國善政其他ニ關スル英文宣傳資料茲ニ

送付ス左ノ趣旨ニ依リ然ル可ク御利用相成度シ

- (一) 四六七八滿洲國發展狀況ニ關スル宣傳資料
- (二) 八滿洲國內治安回復ニ關スル宣傳資料

S 1.3.1.0-1

0117

日三、五、八ハ滿洲國善政ニ關スル宣傳資料
本信送付先 在英大使外五十五公館
本信寫送付先 外務大臣

6 1.3.1.0-1

≡

0118

REEL No. A-0353

0083

アジア歴史資料センター

of hearing the individual claims of foreign creditors. Towards the end of 1932, this commission adopted the following principles as applicable to them.

(1) Of those claims based on transactions in which the merchandise had been delivered (their total amount is about 2,500,000 yuan), 35 % will be paid in cash (national currency) during the first fiscal year of Tatung, and 20 % during the second fiscal year. In respect of payment, all claims are to be treated on the same footing and there will be no discrimination whatever. The remaining claims of this category are to be liquidated by the delivery of government bonds bearing 3 % interest and redeemable in 20 years.

(2) As to the claims growing out of the transactions concluded before 1929, or in which the merchandise had not been delivered in entirety (the total under this head amounts to 5,310,000 yuan), the government is to continue its investigation in order to fix the reasonable amount of damage sustained by the claimants. The claims under this category are to be settled by the delivery of government bonds similar to those mentioned above.

Immediately upon the adoption of these principles, the Manchoukuo government undertook to negotiate with the representatives of claimants grouped by nationality. The Japanese claimants had already received the first cash payment

at the end of the last year. The British claimants acquiesced in the settlement on the above-indicated lines on the 12th of January. The German claimants followed suit on the 17th, and the Americans on the 20th of the same month. The investigation of British claims will be completed in the near future and then that of German and American claims will be commenced.

In all these negotiations the Manchoukuo government has shown an extreme sincerity and has made no preferential treatment on account of the nationality of claimants. Foreign commercial houses well appreciate this attitude, and fully acknowledge the impartial and equitable way in which the Manchoukuo Government has conducted the negotiations. It is true that at first they doubted the market value of the government bonds. But their apprehension was dispelled by the government declaration that the Central Bank of Manchoukuo was ready at any time to make a discount on these Government bonds. Thereafter, the foreign claimants were quite willing to accept the terms offered by the Government.

3. "Wangtao" or "The Way of Benevolent Rule" is the guiding spirit of the new regime of Manchoukuo. One of the most noteworthy instances of the application of this principle is the mitigation of the burden of taxation. The measures already adopted for this purpose include:

(1) The exemption of the land tax, business tax, and certain miscellaneous taxes which were in arrears at the end of June, 1932.

(2) The enactment for an exemption by half of the land tax, as well as other taxes falling due in the winter of this year (1932-33.).

(3) The regulation not to impose fine upon those who failed to pay the land registration tax during the period from December 1932 to June 1933.

4. Since the designation of Hsinking as the capital of Manchoukuo, the lack of housing accommodations has given a great impetus to the building business. The total expenditure for building purposes up to the end of 1932 is estimated at ¥2,859,725. Private building represented ¥1,681,260 and public building represented the rest, namely, ¥1,178,265.

5. In June, 1932, the Manchoukuo Government promulgated a new naturalization law. The number of white Russians in North Manchuria who applied for Manchoukuo nationality has attained a figure as many as 2,525 by January 1933. It

S 1.3.1.0-1

0120

is still on steady increase, which evidences the good administration of the new regime.

6. In Mukden a great many foreign (including Japanese) companies and shops have been established during the year 1932. They include 30 new companies and 180 new shops; and their number continues to increase.

7. The production of cotton textiles in the railway zone and nearby district of Hsinking during 1932 amounted to ¥2,045,000; which shows an increase of ¥798,500 over that of the previous year (¥1,246,500).

8. Sometimes it has been reported in British and American newspapers that the foreign commercial houses established in Manchoukuo are in difficulties, owing to their inability of redeeming the credits which they extended to the former military government in Manchuria, and that they have little confidence in the professions of the new government with regard to this question. These informations are unfounded.

As a matter of fact, the Manchoukuo government has paid a special attention to such claims and has been endeavouring to find out the most equitable method of meeting these claims, in spite of the great need of public funds for other urgent measures. A special claims commission was appointed in Oct. 1932, for the purpose of investigating the question in general and, specifically,

S 1.3.1.0-1

0121

Some of the Recent Happenings in Manchoukuo

1. The amount of foreign (other than Japanese) articles bought by the Manchoukuo Government for its use during the period from the establishment of Manchoukuo (March 1, 1932) up to the end of 1932 is estimated to have reached a grand total of ¥417,000. Automobiles and gasoline head the list; revolvers and telephone apparatus come next.
2. For some time immediately following the Incident of September 18, 1931, the number of foreign visitors to the country was very small apparently because of the danger of bandits. Thanks to the combined efforts of the Japanese and Manchoukuo troops which have been successful in subjugating bandits and other lawless elements, peace and order have been well-nigh established throughout the Manchoukuo territory ~~except the Province of Jehol~~, and the safety of tourists has been assured. This is attested by the fact that the number of foreigners (Japanese and Chinese excluded) who visited Manchoukuo during December, 1932, amounted to 223 and it still increased to 400 in January of this year. Those coming from Shanghai and other places of China for the purpose of investigating commercial prospects of the country, represent the greater part of these tourists. They may be classified by their nationality in the order of their number as follows:
Russians, American, British, French, Polish, Czechs, Greeks, Swiss, and Dutch.

S 1.3.1.0-1

0119

REEL No. A-0353

0000

アジア歴史資料センター

情報部

第三課長

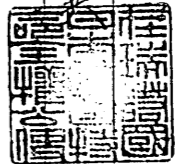
昭和八年三月廿一日

機密第二四号

昭和八年二月廿八日

在瑞典

特命全權公使子爵武者小路公博



外務大臣伯爵内田康哉殿

満鐵作成「リットン」本員一行満洲旅行活動

写真「フィルム」ニ関スル件

客年末在壽府國際聯盟帝國事務局ヨリ標記「フィルム」回送越
名ニ付本年始當地「瑞典フィルム會社」ニ於テ映写シ外務省職員日
瑞協會員其他ヲ招待シ觀覽ニ供シ名處相當ノ好評ヲ博シタルモ
市内一般向宣傳用トシテハ今後「フィルム」ハ出來得ル限り短クシテ活動

在瑞典日本帝國公使館

S 1.3.1.0-1

0136

写真館映写時間ハ全部テ一時間四十五分ナルニ付主幕物ノ前ニ写スト
シテ如何ニ長クトモ二十分以内ニ切詰ルノ要アリ且「トキー」全盛ノ今日ニ
於テハ發聲映画ニ改ム方然ルニシトノ意見ニ一致シタリ
同事務局義ヨリ申越ノ次第モアリ何等御参考正右報告申進ス

本信写送附先 在巴里聯盟事務局

S 1.3.1.0-1

0137

在瑞典日本帝國公使館

情報部

機密第二八號

第二課長

昭和八年二月二十日
左白耳義

臨時代理大使 山形素



外務大臣白鳥内田康哉殿

ソットン委員會滿洲旅行フィルム之実行
本件フィルムハ當各階級ヲ通ジテ成ルベク
廣キ範圍ニ亘リ公開セム目的ヲ以テ當市重要
新聞社ニ對シ其主催ノ下ニ之ガ公演方ヲ交渉

昭和八年四月四日
別紙添付
CI 494 接受



S 1.3.1.0-1 0128

2

シタルニ應謀セザリシニ依リ當市内ニ於テ主トシ
テ実寫乃至學術映画ヲ公演シ居ル Studio 社
(觀衆ハ主トシテ知識階級)ニ交渉、結果同社
ノ希望ニ基キ當國觀衆ノ趣向ニ適合セシムル為
並稍ヤ見辰ナル莫ク省ク爲メ全体ノ約六分ノ一
ヲカットシ一月十三日ヨリ同二十八日迄公演セシメタルガ
(觀衆ハ千七百四十人)其後更ニ各方面ヨリ團件見物
ノ申込アリタルニ依リ同社ニ於テハ別表通り諸團件
及學校、為特別映寫ヲ行ヘル趣ナリ (觀衆約文
千五百)

高之佛國駐支陸軍武官タリシ「バルツ」デマニエ將軍ハ
二月十五日當地「フランシス」會合ニ於テ十六日「リエ」
ニ於テ本件フィルムヲ用テ滿洲國ニ関スル講演ヲ

S 1.3.1.0-1 0129

3

												行ヒタルが実状紹介上相當効果アリシモノト認メ ラル(大寫眞映寫之實シテ廣告及記事並同符 軍講演之實シテ新聞記事別添ス 本信寫送付先 新盟子務局)
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---

GH

S 1.3.1.0-1

特 0130



JVRIER 1933

LE PROBLÈME MANDCHOU
VU PAR LE GÉNÉRAL BRISSAUD-DESMAILLET,
ancien attaché militaire de France en Chine et en Corée

A la tribune de la Société des Nations et dans les journaux, les graves et obscurs événements de Mandchourie ont été évoqués, tantôt soit par le général de division, lors de son voyage en Chine, soit par le général de brigade, lors de son voyage en Mandchourie. On a dit beaucoup de choses sur Mandchourie. On a dit que Mandchourie était un pays riche, un pays fertile, un pays qui avait de grandes ressources. On a dit que Mandchourie était un pays qui avait de grandes ressources. On a dit que Mandchourie était un pays qui avait de grandes ressources.

Il y a 2.000 ans, le Mandchoukouo existait déjà; les multiples tribus habitant ces régions étaient alors groupées en une multitude de petits États, dont les uns ou les autres ont été absorbés par le grand État mandchou, d'après les indications du livre de l'histoire de la Chine. Ce grand État mandchou, qui a existé pendant des siècles, a été détruit par les Mongols, puis par les Manchoux. Le grand État mandchou, qui a existé pendant des siècles, a été détruit par les Mongols, puis par les Manchoux.

Le but premier du nouveau État est d'exterminer le brigandage et d'exterminer les brigands. Le but premier du nouveau État est d'exterminer le brigandage et d'exterminer les brigands. Le but premier du nouveau État est d'exterminer le brigandage et d'exterminer les brigands.

Entre ses frontières naturelles de rivières et de montagnes, le Mandchoukouo présente comme une région homogène et unifiée. Entre ses frontières naturelles de rivières et de montagnes, le Mandchoukouo présente comme une région homogène et unifiée.

Mandchoukouo. Un des temps de l'État mandchou a été construit par les Chinois en violation des traités avec le Japon. Mandchoukouo. Un des temps de l'État mandchou a été construit par les Chinois en violation des traités avec le Japon.

Derrière ce Kongzi et le soutien, il y a le soutien de 150.000 soldats japonais. Derrière ce Kongzi et le soutien, il y a le soutien de 150.000 soldats japonais.

Il faut noter également que l'ancien schisme qui sévit depuis dans le Mandchoukouo, le régime de Mandchoukouo et bientôt l'empereur Fou-yl a repris le titre de protecteur du Lamisme jaune, contre le Lamisme Rouge, favorisé par les Soviétiques du général Brissaud-Desmallet puis surtout pas à Paris. Il faut noter également que l'ancien schisme qui sévit depuis dans le Mandchoukouo, le régime de Mandchoukouo et bientôt l'empereur Fou-yl a repris le titre de protecteur du Lamisme jaune, contre le Lamisme Rouge, favorisé par les Soviétiques du général Brissaud-Desmallet puis surtout pas à Paris.

Il est important en Extrême-Orient, l'y oblige. Il est important en Extrême-Orient, l'y oblige.

Handwritten notes in Japanese characters, including the characters for 'Mandchou' (満洲).

S 1.3.10-1 58 0131

La Mandchourie et le Cinéma

Au programme du studio du Palais des Beaux-Arts figure un reportage filmé sur le voyage de la commission d'enquête que le Conseil de la Société des Nations envoya, l'an dernier, en Mandchourie.

Malgré les apparences, nous doutons fort que ce film ait un caractère officiel. Sans doute, lord Lytton et ses collègues ont été photographiés de face, de profil, en buste, en pied, en wagon-salon, en bateau, en avion, prenant le thé, discutant avec des fermiers, des businessmen, des officiers, des diplomates. Mais on nous montre surtout des ports merveilleusement outillés, des usines en pleine activité, des villes américanisées, des exploitations agricoles « up to date ». Tout cela atteste le prodigieux développement économique dont la Mandchourie est redevable aux capitains et aux ingénieurs japonais. Dans les rues, yassies et propres de Moukden, de Kirin, d'Antung, de Dairen circulent des gens paisibles. Les funiculis et les pontifs de chemin de fer sont gardés par quelques militaires débonnaires. Bref, si l'on ignorait le motif de la présence dans ce pays d'une mission internationale, le Mandchoukouo semblerait être le suprême réduit de la prospérité et de la paix. Pourtant !...

Pourtant, certains événements ont quelque peu troublé ces régions lointaines, il y a seize mois. La Mandchourie était alors mise en coupe réglée par les troupes de Ma-Chan-Cha et par les irréguliers de Tchang-Hsue-Liang. Pillages, vols, assassinats, destructions systématiques, tels étaient les communs méfaits de ces bandes dont les chefs louaient leurs services au plus offrant. Menacés dans leurs personnes et dans leurs biens, les colons japonais appelèrent à l'aide le gouvernement de Tokio. L'intervention de celui-ci fut foudroyante. En quelques semaines, la Mandchourie fut purgée de pillards. Cela n'alla toutefois pas sans larmes, sans batailles. De tout cela, il reste des traces et c'est pourquoi la S. d. N., désireuse de compléter son information, a envoyé sur place une impressionnante cohorte de diplomates, d'experts, de techniciens et de secrétaires. Taudieu, quelle caravane ! L'œil rond de la caméra s'est fixé un instant sur les bagages de ces messieurs : c'est à croire qu'ils avaient emporté toute leur garde-robe !

Saluts militaires, saluts protocolaires, grades d'acclamations spontanées, enfants des écoles agitant des drapeaux, réceptions, etc., au fil ils peuvent se vanter d'avoir été bien accueillis, les enquêteurs espéranto ! Mais nous les voyons beaucoup plus souvent devant des silos, des grues, des bureaux de chefs de gare, des palais et des banques, que sur les lieux où se déroulent les incidents soumis à l'appréciation de leurs sévères mandants.

Les casernes détruites du Nord de Moukden, quelques rails disjointes, un défilé des troupes de Tchang-Hsue-Liang... avant la bagarre de septembre 1931... au plus deux cents mètres de palliade. Et c'est tout !

Nous voudrions bien savoir si les conclusions de la Commission Lytton sont basées sur une enquête aussi sommaire. Dans l'affirmative, nous comprendrions que ce document ne satisfasse ni les Chinois, ni les Japonais.

Quoi qu'il en soit, le film « Mandchoukouo » nous enseigne qu'au Nord de la Chine il y a un pays charmant, pittoresque à souhait, et qui n'a pas fini de faire parler de lui. Aujourd'hui, même les peuples heureux ont... des histoires !

抄 録 オ ー ト ー マ ー ト 機 三

S 1.3.1.0-1

97 0132



EGHOS DU STUDIO

VENDREDI 20 JANVIER 1933
N° 33 5^e ANNEE

STUDIO DU PALAIS DES BEAUX ARTS
DIRECTION : 23, rue Ravenstein, BRUXELLES, Tél. 12.41.08

LOCATIONS :
Téléphones : 11.13.74 — 11.13.75

A partir du Vendredi 20 Janvier

EN EXCLUSIVITE

2^{me} SEMAINE

Tous les jours spectacle permanent à partir de 2h. 30
Dernière séance à 9 heures 15

A qui appartient le monde ?

Kuhle Wampe

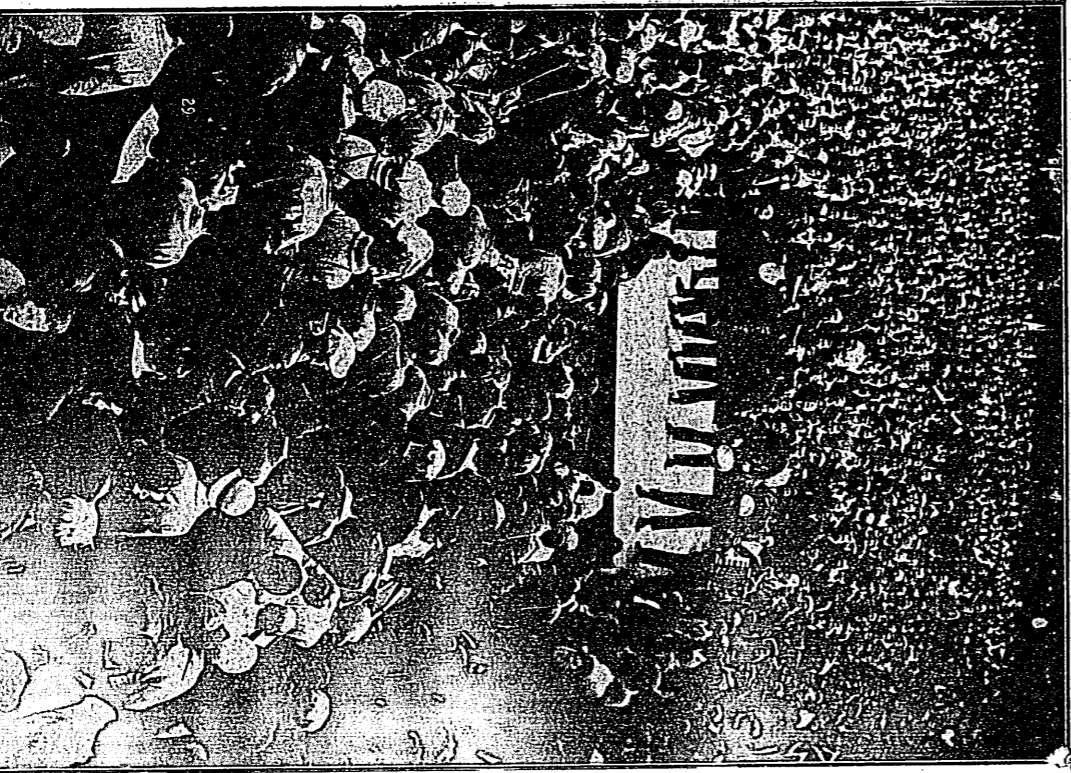
de S.-Th. Dudoz et de Brecht

L'un des grands problèmes de l'Allemagne d'aujourd'hui

Film réalisé
avec
le concours
de 20.000
chômeurs et

**Hertha
Thiele**

la troublante
Manuela de « Jeunes
filles en Uniforme »



PARLANT FRANÇAIS
ENFANTS NON ADMIS

0135

REEL No. A-0353

ERHARD STIMM

VENREDI 20 JANVIER 1933
5^e ANNEE

STUDIO DU PALAIS DES BEAUX ARTS
DIRECTION : 23, rue Ravenstein. BRUXELLES. Tél.: 12.41.08

LOCATION :
Téléphones : 11.13.74 — 11.13.75

A partir du Vendredi 20 Janvier
EN EXCLUSIVITE

2^{me} SEMAINE
Tous les jours spectacle permanent à partir de 2h. 30
Dernière séance à 9 heures 15

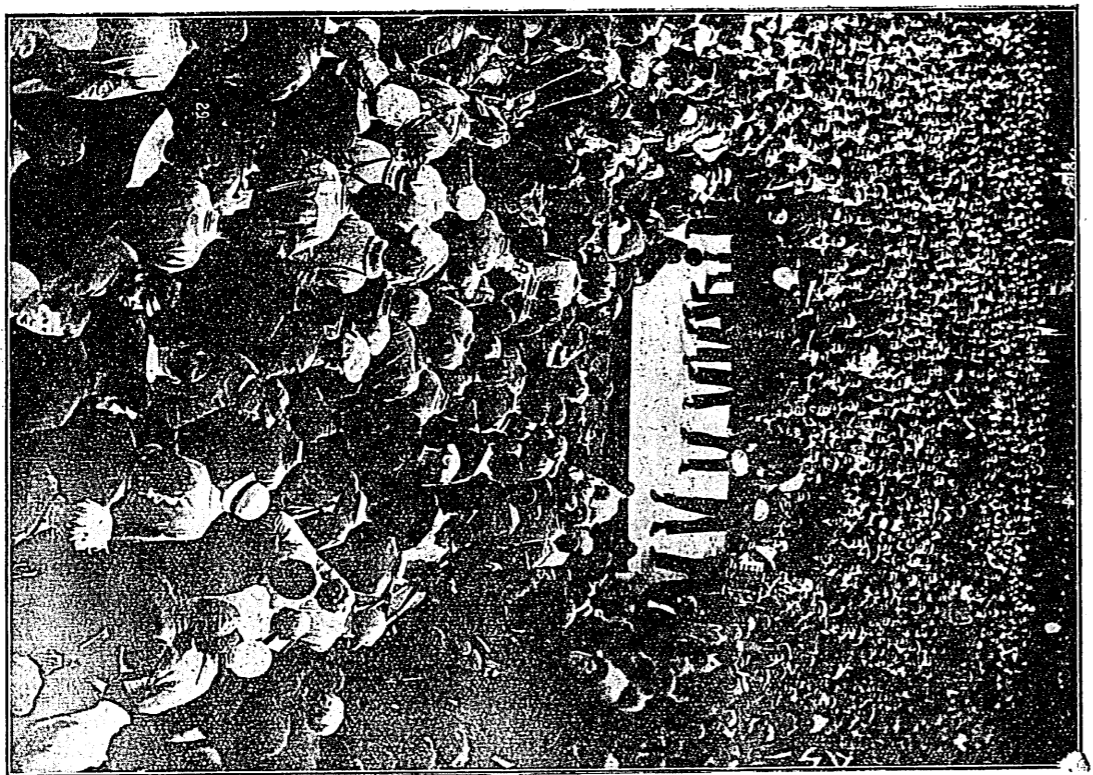
A qui appartient le monde ?

Kuhle Wampe

de S.-Th. Dudow et de Brecht

(L'un des grands problèmes de l'Allemagne d'aujourd'hui)

Film réalisé
avec
le concours
de 20.000
chômeurs et
**Hertha
Thiele**
la troublante
Manuela de « Jeunes
filles en Uniforme »

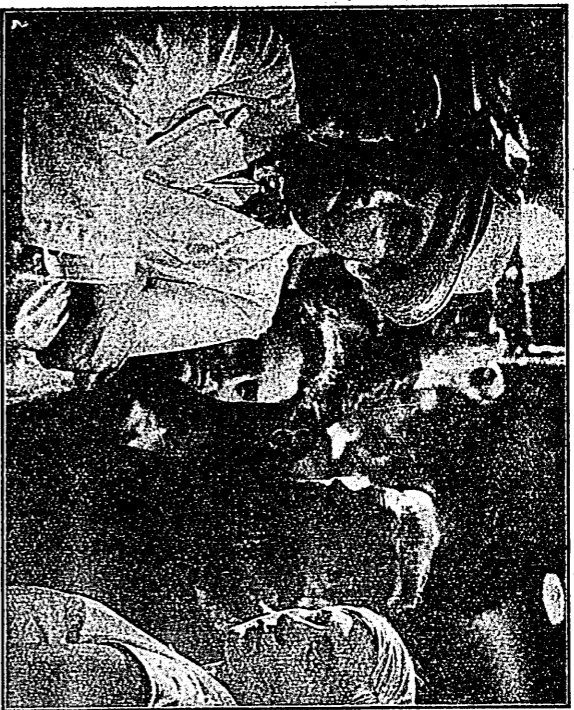


PARLANT FRANÇAIS
ENFANTS NON ADMIS

0135

REEL No. A-0353





Dans le train, après une journée de sport, s'installe une discussion « économique » entre bourgeois et jeunes ouvriers.

Kuhle Wampe

par P. WERRIE (« XX^e Siècle »)

« Kuhle Wampe » est le nom d'une colonie de chômeurs aux environs de Berlin, jadis campement de weed-and sur les bords d'un lac. Aujourd'hui, village de tentes où vivent des familles de sans travail expulsés de ces grandes casernes qui, récemment encore, faisaient l'orgueil de Berlin. Casernes maintenant délabrées par l'abandon, la misère et le chômage, cette famille larvée.

C'est par la vue de ces innombrables que le film de Bert Brecht et Ernst Ottwalt commence. On pouvait s'attendre à quelque reportage puissant et implacable sur la vie des chômeurs berlinois, à quelque documentaire fouillé de cette « actualité » lamentable, de ce véritable fléau qu'est le chômage. Ne croyez-vous pas que sans air ainsi, ne fût-ce que fragmentairement ou du moins dans un de ses aspects locaux cet énorme phénomène que consistent les trente millions de chômeurs dont la présence risque d'emporter le monde et la civilisation. — ne croyez-vous pas que cela pouvait tenter un cinéaste ? Mais il paraît que le scénario est un mal nécessaire. Alors nous avons un scénario.

En vérité, l'histoire sert à concentrer l'observation sur le cas d'une famille, père, mère, fils et fille, qui nous sont présentés d'une manière assez anonyme presque impersonnelle et quasi comme des cas généraux. C'est le père, la mère, le fils et la fille.

La famille décroît lentement, essayant de sauver les apparences, à travers des disputes, quotidiennes, fadigantes, sortides, qui sont fort bien exposées par le film, d'une manière très réprimée, sans emphase ni faux pathétique.

Jusqu'au jour où le fils, sans un mot, se jette par la fenêtre du sixième ou du septième étage. Un fait divers de plus, un chômeur de moins, comme dit une femme.

La fille — dont le rôle est tenu par la protagoniste de « Jeunes Filles en Uniforme » — courtise un chauffeur de taxi qui, lui, vit dans cette colonie de Kuhle Wampe dont nous avons parlé et il finit par y emmener la famille toute entière dont le propriétaire a fait mettre les biens dans une situation telle que son ami n'a plus qu'un devoir : l'épouser. Bon gré, mal gré, il accepte les fiançailles et cela nous vaut un spectacle de belle verte allemande assez haut en couleur. Cependant le fiancé y met tant de mauvaise grâce que la jeune femme le quitte et retourne à Berlin où, guidée par des amis, elle trouve du travail dans une organisation sportive d'ouvriers. Elle prend part à la préparation d'une grande fête sportive, dont le spectacle nous est montré, y compris les ébats nudistes qui n'a-

joutent absolument rien à la marche ni à la portée du film, pas plus que la fête elle-même, du moins dans sa partie sportive qui n'est qu'une sommaire illustration, une revue cursive, comme disent les actualités, des courses de motos, de nage, d'aviron, etc.

Le chauffeur de taxi retrouve sa fiancée et revient à de meilleurs sentiments. Nous retrouvons également l'atmosphère de ce film qu'on vit jadis et qui s'appelait « Vive dimanche ».

Pour finir, toute la bande de jeunes sportifs revient en ville. Dans le train, une discussion générale s'installe entre jeunes ouvriers et bourgeois. Il y est beaucoup question de café que l'on jette à la mer au Brésil et du blé que l'on brûle pour chauffer les locomotives. Nous importons l'esprit d'un monde meilleur. Du documentaire que nous espérons, nous voilà tombés dans le film à scénario qui glisse bientôt dans le film à thèse. D'où un continu déplacement de l'inté- rêt. Il faut dire d'ailleurs que le film est coupé en trois chapitres.

Mais où est donc passée l'atmosphère du début : cette âpre misère du chômage ?

Ici, par instants, nous avons eu le sentiment de l'admission : admission au sein de la vie même des chômeurs. Et pas nécessairement quand le film nous la décrit, mais par l'intérieur et donc prétendait nous y introduire. Mais plutôt dans les moments où l'on ne s'y attendait pas. Par exemple, au milieu de ces murs ébranlés, dans la cour d'une de ces casernes géantes de style moderne : deux chômeurs musiciens nous tournent le dos. L'un joue d'un petit harmonium et l'autre d'une sorte de clovin. Un cycliste rentre chez lui et s'arrête. C'est presque immobile, cet instant, presque antichémotographique, cela possède toutes les apparences du théâtre filmé de la mise en scène et rien n'est plus intensément cinématographique, rien n'est plus « vie surprise », rien n'exerce plus d'émprise, ne crée mieux l'illusion que nous y sommes en chair et en os.

Ces instants d'admission sont rares, malheureusement. Au début du film, on en découvre un autre lors d'un lent rassemblement de chômeurs à bicyclettes. Plus tard on éprouve encore ce sentiment si précieux de vie vécue, dans la beuverie des fiançailles. Puis au milieu de la fête sportive, lorsque la « revue » des sports terminée, on nous montre une scène vraiment extraordinaire : un théâtre de chômeurs, théâtre joué par des musiciens-chanteurs qui miment certaines scènes — que nous n'avons pu comprendre, hélas ! — théâtre sur tréteau, sans costumes, auquel la foule des chômeurs qui l'entourent (et ils sont quatre milliers) participe

en braves et charnts révolutionnaires.

Je dis la foule des chômeurs. Précisément sont-ce les chômeurs ? On ne sait plus. Pour des chômeurs, cette vie de canotage, d'aviron, de nage et de théâtre, ressemble singulièrement à celle de jeunes lords anglais d'Oxford ou de Cambridge. Si ce ne sont des chômeurs, sont-ce des ouvriers sportifs ? Et quest-ce que c'est, ces ouvriers sportifs ? De jeunes communistes ou des scouts ? Et aussi qu'est-ce qu'ils viennent faire exactement dans le film tel qu'il nous est présenté ? Il faut bien dire : tel qu'il nous est présenté. Car la censure a-opéré. Non seulement dans nos pays, mais en Allemagne d'abord. Est-ce à elle que l'on doit cette confusion que nous venons de signaler ?

Tel quel, en tous les cas, le film — outre quelques bonnes chansons qui sont dues au musicien de « No man's land » mais qui évoquent terriblement celles de Kurt Weill dans l'« Opéra de Quat sous » — le film est de bon cinéma. Son thème est nouveau. Il contient quelques grands passages. Il appartient à la catégorie des films collectifs, films de groupes et ses meilleurs morceaux sont précisément les morceaux de groupes, tandis que les di-

logues et la plupart des scènes à trois ou quatre personnages sont fausses ou fa- briquées. Il relève encore de ce genre éminemment allemand : le film qui ne peut se limiter à un genre, qui greffe le documentaire sur l'information journalistique, le scénario sur celle-ci, et la thèse sur le tout, ce qui fait le plus bel hybride qui soit dans le monde du cinéma.

P. WERRIE

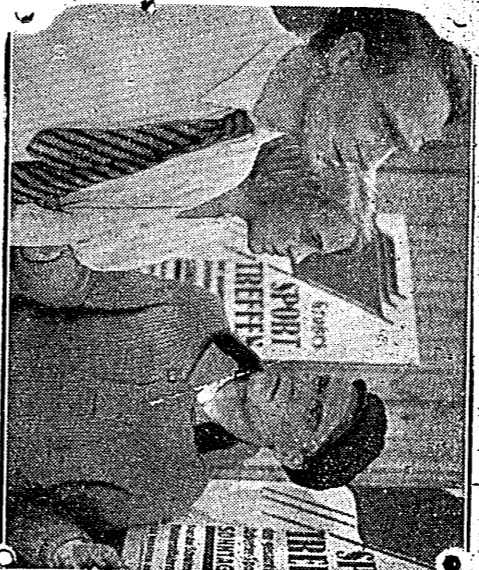
NOTE SUR « KUHLE WAMPE »

Scénario de Brecht et Ottwalt. Musique de Hanns Eisler. Régle de S. Th. Dudow. Architectes : Robert Schapenbergh et Carl P. Hauer. Prises de vues : Karl Emil. Lyries : Hélène Weigel et Ernst Busch.

Exécuteurs : Hertha White, Ernst Busch, Martha Walter, Adolf Fischer, Lili Schönborn, Max Sablotzki, Alfred Schaefer, etc.

Avec la participation de 4.000 ouvriers sportifs, d'une troupe d'ouvriers acteurs, d'un chœur ulmann, de l'Association de chant « Nord », d'ouvriers chanteurs du Grand-Berlin et du chœur de l'Opéra d'Etat de Berlin.

(Extrait du « XX^e Siècle »).



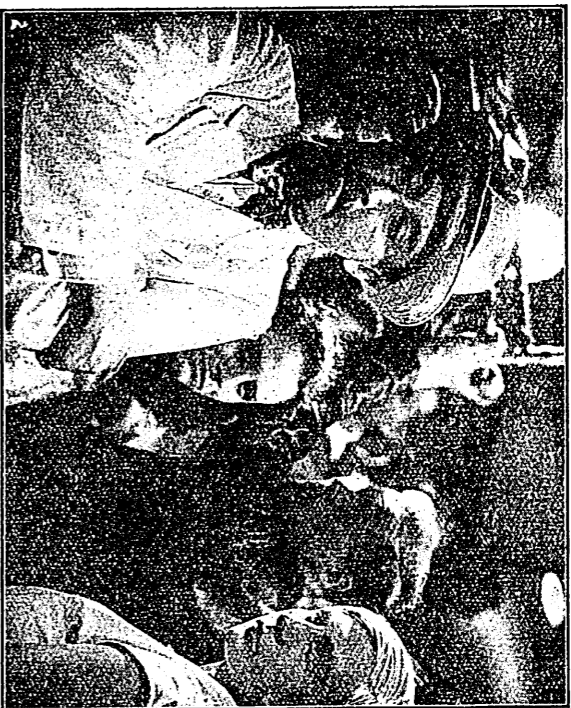
Une scène de « Kuhle Wampe » : au club des ouvriers sportifs.



La jeune fille et son fiancé le chauffeur. On reconnaît, dans la jeune fille, Hertha Thiele, qui jouait le rôle principal de « Jeunes Filles en Uniforme ».



Bombance!



Dans le train, après une journée de sport, s'installe une discussion « économique » entre bourgeois et jeunes ouvriers.

Kuhle Wampe

par P. WERRIE (« XX^e Siècle »)

« Kuhle Wampe » est le nom d'une colonie de chômeurs aux environs de Berlin, jadis campement de weed-end sur les bords d'un lac. Aujourd'hui, village de tentes où vivent des familles de sans travail expulsés de ces grandes casernes qui, récemment encore, faisaient l'orgueil de Berlin. Casernes maintenant délabrées par l'abandon, la misère et le chômage, cette famine larvée.

C'est par la vue de ces innombrables que le film de Bert Brecht et Ernst Ottwalt commence. On pourrait s'attendre à quelque reportage puissant et implacable sur la vie des chômeurs berlinois, à quelque documentaire fouillé de cette « actualité » lamentable, de ce véritable fléau qu'est le chômage. Ne croyez-vous pas que saisir ainsi, ne fut-ce que fragmentairement ou du moins dans un de ses aspects locaux cet énorme phénomène que contiennent les trente millions de chômeurs dont la présence risque d'emporter le monde et la civilisation, — ne croyez-vous pas que cela pouvait tenter un cinéaste ? Mais il paraît que le scénario est un mal nécessaire. Alors nous avons un scénario.

En vérité, l'histoire sert à concentrer l'observation sur le cas d'une famille, père, mère, fils et fille, qui nous sont présentés d'une manière assez anonyme presque impersonnelle et quasi comme des cas généraux. C'est le père, la mère, le fils et la fille.

La famille décroît lentement, essayant de sauver les apparences, à travers des disputes quotidiennes falanges, sortides, qui sont fort bien exposées par le film, d'une manière très réprimée, sans emphase ni faux pathétique.

Jusqu'au jour où le fils, sans un mot, se jette par la fenêtre du sixième ou du septième étage. Un fait divers de plus, un chômeur de moins, comme dit une femme.

La fille — dont le rôle est tenu par la protagoniste de « Jeunes Filles en Uniforme » — courtise un chauffeur de taxi qui, lui, vit dans cette colonie de Kuhle Wampe dont nous avons parlé et il finit par y emmener la famille toute entière dont le propriétaire a fait mettre les meubles à la rue. La jeune fille se trouve bientôt dans une situation telle que son ami n'a plus qu'un devoir : l'épouser. Bon gré, mal gré, il accepte les fiançailles et cela nous vaut un spectacle de beauté allemande assez haut en couleur. Cependant le fiancé y met tant de mauvaise grâce que la jeune femme le quitte et retourne à Berlin où, guidée par des amis, elle trouve du travail dans une organisation sportive d'ouvriers. Elle prend part à la préparation d'une grande fête sportive, dont le spectacle nous est montré, y compris les ébats nudistes qui n'a-

joutent absolument rien à la marche ni à la portée du film, pas plus que la fête elle-même, du moins dans sa partie sportive qui n'est qu'une sommaire illustration, une revue curieuse, comme on donne les actualités, des courses de motos, de nage, d'aviron, etc.

Le chauffeur de taxi retrouve sa fiancée et revient à de meilleurs sentiments. Nous retrouvons également l'atmosphère de ce film qu'on vit jadis et qui s'appelle « Vive dimanche ».

Pour finir, toute la bande des jeunes sportifs revient en ville. Dans le train, une discussion générale s'installe entre jeunes ouvriers et bourgeois. Il y est beaucoup question de café que l'on jette à la mer au Brésil et du blé que l'on brûle pour chauffer les locomotives. Nous importons l'esprit d'un monde meilleur. Du documentaire que nous espérons, nous voilà tombés dans le film à thèse, qui glisse bientôt dans le film à thèse. D'où un continu déplacement de l'intéret. Il faut dire d'ailleurs que le film est coupé en trois chapitres.

Mais où est donc passée l'atmosphère du début : cette âpre misère du chômage ?

Ici, par instants, nous avons eu le sentiment de l'admission : admission au sein de la vie même des chômeurs. Et pas nécessairement quand le film nous la décrivait de l'intérieur et donc présentait nous y introduire. Mais plutôt dans les moments où l'on ne s'y attendait pas. Par exemple, au milieu de ces murs ébranlés, dans la cour d'une de ces casernes géantes de style moderne : deux chômeurs musiciens nous tournent le dos. L'un joue d'un petit harmonium et l'autre de la basse de clown. Un cycliste rentre chez lui et s'arrête. C'est presque immobile, cet instant, presque antichémotographique, cela possède toutes les apparences du théâtre filmé, de la mise en scène et rien n'est plus intensément cinématographique, rien n'est plus « vie surprise », rien n'exerce plus d'émprise, ne crée mieux l'illusion que nous y sommes en chair et en os.

Ces instants d'admission sont rares, malheureusement. Au début du film, on en découvre un autre lors d'un lent rassemblement de chômeurs à bicyclettes. Plus tard on éprouve encore ce sentiment si précieux de vie volée, dans la beuverie des fiançailles. Puis au milieu de la fête sportive, lorsque la « revue » des sports terminée, on nous montre une scène vraiment extraordinaire : un théâtre de chômeurs, théâtre joué par des musiciens-chanteurs qui imitent certaines scènes — que nous n'avons pu comprendre, hélas ! — théâtre sur tréteau, sans costumes, auquel la foule des chômeurs qui l'entourent (ce ils sont quatre milliers) participe

en braves et chants révolutionnaires.

Je dis, la foule des chômeurs. Précisément sont-ce les chômeurs ? On ne sait plus. Pour des chômeurs, cette vie de canotage, d'aviron, de nage et de théâtre, ressemble singulièrement à celle de jeunes lords anglais d'Oxford ou de Cambridge. Si ce ne sont des chômeurs, sont-ce des ouvriers sportifs ? Et quest-ce que c'est, ces ouvriers sportifs ? De jeunes communistes ou des scouts ? Et aussi qu'est-ce qu'ils viennent faire exactement dans le film tel qu'il nous est présenté ? Il faut bien dire : tel qu'il nous est présenté. Car la censure a opéré. Non seulement dans nos pays, mais en Allemagne d'abord. Est-ce à elle que l'on doit cette confusion que nous venons de signaler ?

Tel quel, en tous les cas, le film — outre quelques bonnes chansons qui sont dues au musicien de « No man's land » mais qui évoquent terriblement celles de Kurt Weill dans l'« Opéra de Quat' sous » — le film est de bon cinéma. Son thème est nouveau. Il contient quelques grands passages. Il appartient à la catégorie des films collectifs, films de groupes et ses meilleurs morceaux sont précisément les morceaux de groupes, tandis que les di-

logues et la plupart des scènes à trois ou quatre personnages sont fausses ou faiblardes. Il relève encore de ce genre éminemment allemand : le film qui ne peut se limiter à un genre, qui greffe le documentaire sur l'information journalistique, le scénario sur celle-ci, et la thèse sur le tout, ce qui fait le plus bel hybride qui soit dans le monde du cinéma.

P. WERRIE.

NOTE SUR « KUHLE WAMPE »

Scénario de Brecht et Ottwalt. Musique de Hanns Eisler. Régie de S. Th. Duldow. Architectes : Robert Scharpenberg et Carl P. Hauser. Prises de vues : Karl Emilich. Lyrics : Hélène Weigel et Ernst Busch.

Exécutants : Hertha White, Ernst Busch, Martha Walter, Adolf Fischer, Lili Schönborn, Max Sablotzki, Alfred Schaefer, etc.

Avec la participation de 4,000 ouvriers sportifs, d'une troupe d'ouvriers acteurs, d'un chœur ulmann, de l'Association de chant « Nord » et d'ouvriers chanteurs du Grand-Berlin et du chœur de l'Opéra d'Etat de Berlin.

(Extrait du « XX^e Siècle »).



Une scène de « Kuhle Wampe » : au club des ouvriers sportifs.



La jeune fille et son fiancé le chauffeur. On reconnaît, dans la jeune fille, Hertha Thiele, qui jouait le rôle principal de « Jeunes Filles en Uniforme ».



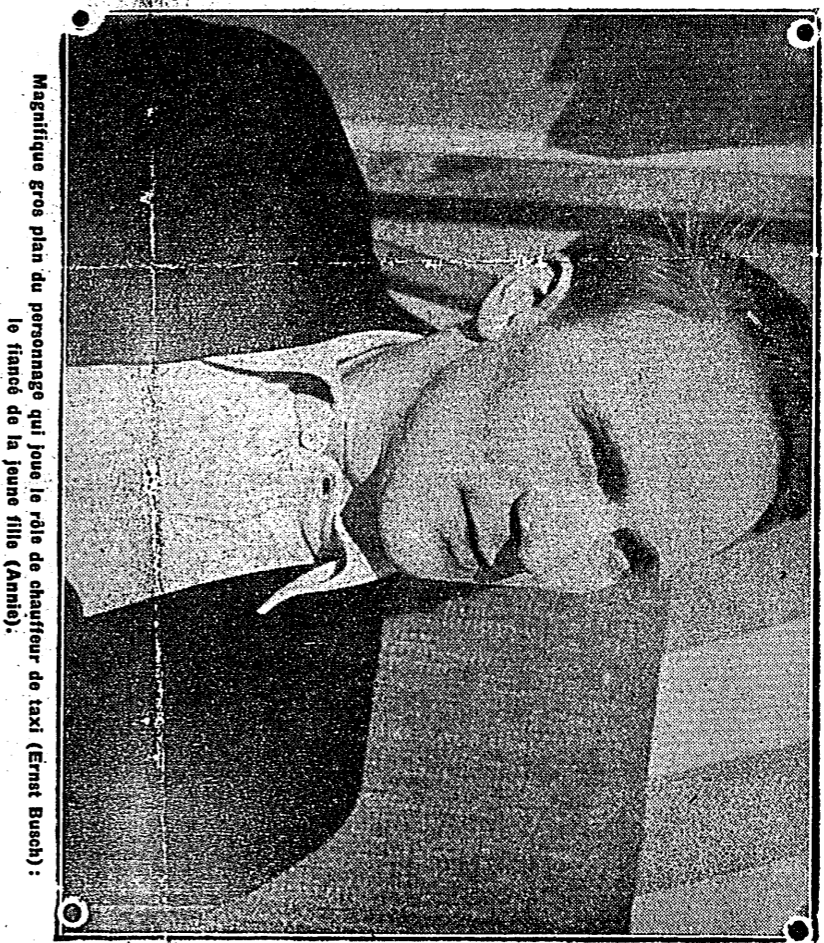
Bombance !

"Kuhle Wampe"

de Bert BRECHT et Th. DUDLOW

Ceux qui ont pensé et réalisé cet ouvrage ont travaillé avec un acharnement désespéré pour vaincre les difficultés d'argent, et toutes les embûches élevées par un gouvernement qui redoutait les réactions des masses devant cet amoncellement de vérités criardes.

En quelques images d'une saisissante brutalité, le problème du chômage se dévoile. Les « sans travail », en vélos, rassemblés comme au départ d'une course à courir, attendent les entraîneurs de journaux. La même route d'asphalte les mène aux mêmes échecs. Partout c'est la réponse négative. Fabriqués, les jarrets usés, leurs vélos rouillés, ils rentrent dans de pauvres logis. Une famille entière désespérée continue ses efforts pour lutter contre un destin impitoyable. La fille marche pendant des kilomètres, coupe le vent, de sa robe de toile blanche, fraîche parce que c'est elle qui la porte. Les souliers battent le pavé, traversent les carrefours, froilent les autos de fonte, l'indifférence d'une ville tiède et sans soleil. Elle est une tache blanche, comme un papillon sans regard, et qui cherche à vivre. A la maison, le père, tira les fils divers, racontera les danses de Mita, Hani, les deux jeunes à Rome, cachés et le reste...



Magnifique gros plan du personnage qui joue le rôle de chauffeur de taxi (Ernst Busch) : le fiancé de la jeune fille (Annie).

Ces gens sont simples, ce sont de ceux que l'on rencontre tous les jours, ils n'ont rien à apprendre, pas de fard à se mettre, leurs visages sont pleins de tâches, creusés par la vie, leurs mains courent le pain en grosses tranches et ne cachent rien de leur rugosité. Puis, incapables de payer leur loyer, mis sur le carreau par décret de justice, ils vont jusqu'à Kuhle Wampe en pleine forêt, où un minimum de confort leur est assuré d'une façon assez inattendue et que nous apprécierons sans trop la comprendre. Des journées à l'air libre, dans l'eau, dans la mousse, tout ce contraste d'avec leurs tendis étouffants les amène à prendre conscience de leur individualité; ils apprennent à vaincre dans le sport, ils passent leurs propres expériences et marchent en avant au son d'une mélodie de victoire.

1. **PROGRAMME**
 2. **DÉSSIN ANIMÉ SONORE**
 3. **MANDCHOUKOUO**

Le film de la Commission, l'ytion envoyée en Mandchourie, par la Société des Nations à l'effet d'étudier le conflit sino-japonais.

KUHLE WAMPE
 (Une face de l'Allemagne d'aujourd'hui)

ENFANTS NON ADMIS PARLANT FRANÇAIS

PROCHAINEMENT

LA POLITIQUE

LE SPORT

LE NUDISME INTEGRAL

EN ALLEMAGNE

AU DELA DU RHIN

L'Allemagne vue par des français à travers des images allemandes

Parlant Français

板巻本二冊附属

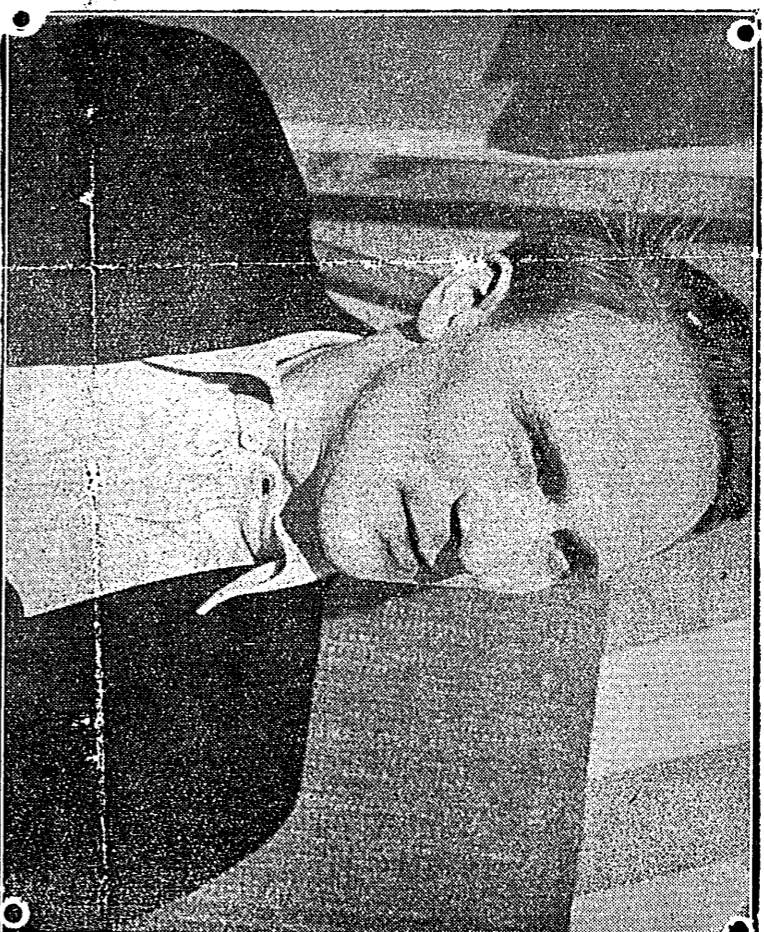
"Kuhle Wampe"

de Bert BRECHT et Th. DUDLOW

Ceux qui ont pensé et réalisé cet ouvrage ont travaillé avec un acharnement désespéré pour vaincre les difficultés d'argent, et toutes les embûches élevées par un gouvernement qui redoutait les réactions des masses devant cet amoncellement de vérités criardes.

En quelques images d'une saisissante brutalité, le problème du chômage se dévoile. Les « sans travail », en vélos, rassemblés comme au départ d'une chasse à courre, attendent les critiques de journaux. La même route d'asphalte les mène aux mêmes échecs. Partout c'est la réponse négative. Fatigués, les jarrets usés, leurs vélos rouillés, ils rentrent dans de pauvres logis. Une famille entière désemparée conjugue ses efforts pour lutter contre un destin impitoyable. La fille marche pendant des kilomètres, coupe le vent, de sa robe de toile blanche, fraîche parce que c'est elle qui la porte. Les souliers battent le pavé, traversent les carrefours, froilent les autos et toute l'indifférence d'une ville tiède et sans soleil. Elle est une tache blanche, comme un papillon sans regard et qui claque à vivre. A la maison, le père lira les faits divers, racontera les danses de Mata Hari, ses deux seins à peine cachés et le reste tout nu, les détails de ses affaires, pendant que la mère égrenne les comptes de ménage et revêt les formes de ses légumes qui coûtent si chers. Le fils se jette par la fenêtre, pour ne plus souffrir, après avoir enlevé sa montre et sera au pied du building une petite tache grise recouverte d'un vieux tissu... Un abnèment de moins...

Ces gens sont simples, ce sont de ceux que l'on rencontre tous les jours, ils n'ont rien à apprendre, pas de fard à se mettre, leurs visages sont pleins de taches, creusés par la vie, leurs mains coupent le pain en grosses tranches et ne cachent rien de leur rugosité. Puis, incapables de payer leur loyer, ils s'en vont le carreau par décision de justice. Ils vont jusqu'à Kuhle Wampe en pleine forêt, où un minimum de confort leur est assuré d'une façon assez inattendue et que nous apprécions sans trop la comprendre. Des journées à l'air libre, dans l'eau, dans la mousse, tout ce contraste d'avec leurs tandis étouffants les amène à prendre conscience de leur individualité; ils apprennent à vaincre dans le sport, ils passent leurs propres espérances et marchent en chantant au son d'une mélodie de victoire. Le retour à la ville se fait avec de nouvelles forces. On se réunit dans le métro, ils sont collés aux citadins, on échange avec eux la simplicité de leurs raisonnements. On crève de faim et on brûle du café et du blé de l'autre côté du monde. Personne n'y peut rien. Le monde ne changera pas. Seule une voix de jeune femme parle de l'aventir en quelques mots saccadés qui mettent fin à la chanson inachevée de leurs espoirs. André CAVVIN, (Radio-Belgique).



Magnifique gros plan du personnage qui joue le rôle de chauffeur de taxi (Ernst Busch) : le fiancé de la jeune fille (Annie).

PROGRAMME
DESSIN ANIMÉ SONORE
MANDCHOUKOUO

un reportage cinématographique sensationnel, l'ytton envoyée en Mandchourie par la Société des Nations à l'effet d'étudier le conflit sino-japonais.

KUHLE WAMPE
(Une face de l'Allemagne d'aujourd'hui)
PARLANT FRANÇAIS
Enfants non admis

PROCHAINEMENT

LA POLITIQUE

L'Allemagne vue par des français à travers des images allemandes
Parlant Français

LE SPORT

LE NUDISME INTEGRAL
EN ALLEMAGNE

AU DE LA DU RHM

坂本 浩二 氏 蔵

Kuhle Wampe et la presse

Grande influence des films russes sur ce film allemand, comme sur beaucoup d'autres de cette école, qui a bien profité des leçons reçues. De même que dans les films russes, « Kuhle Wampe » abonde en « gros plans », toujours judicieusement placés et renforçant la valeur expressive du film.

Et de même que les films russes, « Kuhle Wampe », qui est aussi « un film de masse », nous intéresse aux foules qu'il a su animer d'un mouvement vital et entraînant dans un rythme qui nous force à les suivre.

Comme les films russes, « Kuhle Wampe » est, dit style oratoire : il a l'éloquence, la chaleur, la force de persuasion d'un beau discours. A la fin, nous ne pouvons qu'applaudir et des deux mains.

Bert Brecht, l'auteur du scénario qui fit aussi le scénario de « L'Opéra de Quat' Sous », avait déjà prévu, dans le film de Fass, son intelligence des foules. Qu'on se souvienne de la rue obsédante et lente des mendicants se portant devant de la Reine.

On retrouve ici la même impétuosité hispanique, la même force que rien n'arrête, la même conviction inconsciente...

Les acteurs ! Presque tous des inconnus, des ouvriers pour la plupart (autre ressemblance avec les films russes qui emploient le moins possible d'acteurs professionnels).

Eritz, c'est Ernst Busch ; un si bon acteur que, même en le voyant parmi ceux qui n'en sont pas, on oublie qu'il n'est un.

Amie est Hertha Thiele, l'inoubliable Manuela des « Jeunes Filles en Uniforme ».

Amie ne pouvant être que cette jeune-enfant, cette fille solide, saine et calme, avec ce bon visage confiant, ces yeux clairs, vite voilés de tristesse, cette bouche large et épaisse qui montre à chaque mot toutes ses dents, ces lèvres gonflées, avides de baisers et de confidences. Elle est jeune.

Elle est simple. Elle a dit, avec son bon rire :

« Mon seul mérite est d'avoir tourné ce film en y mettant tout mon cœur. Il n'y a pas de vedettes dans « Kuhle Wampe ».

Car, malgré son succès, malgré l'accueil triomphal qu'on lui fit récemment en France, Hertha Thiele ne s'est jamais considérée comme telle.

Janine BOUVISSOUNOISE.

« Hebdo ».

Si nos programmes vous intéressent, et si vous désirez recevoir régulièrement et gratuitement les

«Echos du Studio»

envoyez-nous
votre adresse

STUDIO

23, rue Ravenstein

PALMIS DES BEAUX-ARTS

BRUXELLES

Tél. 12.41.08

LES ARTS GRAPHIQUES, s.c., 201, CH. DE HAECHT,
SCHERBERG. — Gérant: J. VANTRIER.

POUR LA PREMIÈRE FOIS

au Palais des Beaux-Arts
(GRANDE SALLE)

Grand Festival BEE THOVEN

EN

cinq concerts symphoniques

SAMEDIS et DIMANCHES à 14 h. 30

LES NEUF SYMPHONIES

Sous la direction de

ERICH

KLEBER

Directeur général musical de l'Opéra d'Etat
de Berlin
Chef d'orchestre des Concerts Philharmoniques
de New-York et de Buenos-Aires

PROGRAMMES :

25-26 FEVRIER 1933, A 14 h. 30	45 MARS 1933, A 14 h. 30
Symphonie n° 1.	Symphonie n° 3.
Symphonie n° 2.	Symphonie n° 6.
Ouverture de « Léonore » III.	
18-19 MARS 1933, A 14 h. 30	1-2 AVRIL 1933, A 14 h. 30
Ouverture de « Coriolan ».	Ouverture de « Prométhée ».
Symphonie n° 4.	Symphonie n° 8.
Symphonie n° 5.	Symphonie n° 7.

NOUVELLE SYMPHONIE

pour soli, chœurs et orchestre
avec le concours de
Kate HEIDERSBACH, Margarete KLOSE,
Helge ROSWÄNDEL, Emmanuel LIST.
Les chœurs du Conservatoire Royal de Bruxelles
et les chœurs des Concerts Spirituels (350 exécutants)

LA LOCATION EST OUVERTE

Abonnements spéciaux aux cinq concerts

CORBELLIES	FR.	300	BALCONS DE COTE	175
LOGES DE FACE	300	LOGES DE COTE	175
FAUTEUILS 1re SERIE	250	GALERIES	(Epousés)
FAUTEUILS 2e SERIE	225	FAUTEUILS DE LOGE	(Epousés)
BALCONS DE FACE	225		

Bureau de location au Palais des Beaux-Arts, 23, rue Ravenstein.
Téléphones: 11.43.74 et 11.43.76. (Ouvert de 11 à 17 heures.)

PALAIS DES BEAUX-ARTS

(Salle de Musique de Chambre)

Les 20, 21, 22, 23 et 24 janvier,
à 20 h. 45

Matinée le dimanche 22, à 14 h. 45

LE FINEUX BILLET

KURT JOOSS

GIessen

La capitale

Musique d'Al. TANSMAN

Pavane de l'Infante défunte

Musique de Maurice RAVEL

Un bal dans le vieux Vienne

Musique de Joseph LANNER
et Fritz R. COHEN

LA TABLE VERTE

Ballet de Kurt JOOSS

Musique de Fritz R. COHEN.

La sensation de la saison à Paris.

PLACES : 45, 30 et 20 francs

PALAIS DES BEAUX-ARTS

Société des Spectacles et Conférences.

Les Conférences

des « Ambassadeurs ».

LÉON BLUM

parlera

le mercredi 1er février à 20.45 heures

« Stendhal et la Vie Politique.

de son temps ».

Edouard HERRIOT

Date et sujet non encore déterminés

Alexandre

MILLERAND

parlera

le mercredi 8 février à 20.45 heures

Idealistes et Idéologues

de 1919 à 1933.

Prix des places par conférence :
30, 20 et 10 francs.

PALAIS DES BEAUX-ARTS

Société des Spectacles et Conférences

Jouidi 2 février à 20 h. 45

Le plus grand comédien de langue allemande

Alexandre MOISSI

dans

Les Revenants

d'Ibsen.

Vendredi 27 et samedi 28 janvier

à 20 h. 45

pour la première fois en langue française

à Bruxelles

“ LE CYGNE ”

de Franz HOKNAR

le grand écrivain hongrois

AVEC

Vera KORBÈNE

de la Comédie Française

Prix des places : 45, 30 et 20 fr.